2019（令和元）年5月8日（水）　京都新聞（夕刊）3面

CULTURE
カルチャー

上賀茂発
地球研フィールドノート

カミは「自然との向き合い方」の履歴

❷「土地に命」を与える

総合地球環境学研究所・研究員　嶋田奈穂子

高島市安曇川町横江の布留神社。初夏の田植えの後、鎮守の森が田んぼに浮かぶ島のように見える。土地や自然と人はどのように向き合ってきたのか、その履歴が神社の立地には刻まれている（2018年6月）

「なぜ、そこに神社があるのか」。学生時代、初夏の田んぼに浮かぶ神社の風景を見ながら、ふと疑問を抱きました。古墳の頂、岬の突端、ため池などさまざまな立地の神社を見るたびに疑問がふくらみ、神社地の機能や意味を読み解く研究を始めました。地域の人々がその土地を「神社」として守り続ける理由を知りたかったからです。

神社調査では必ず最初にお参りをし、境内の形状を写し取り、周辺の土地利用を観察し、立地の特長を考察します。それを数十社、数百社と繰り返していると、調査というより土地を相手に問答している気になってきます。

ラオスにも「鎮守の杜」

2010年からの2年間、ラオスで調査する機会を得ました。ラオスには村を守る精霊が棲む森があり、社があって祭もします。日本で言う「鎮守の杜」のような聖地と考えることができるでしょう。こうした信仰の形は東南アジアに広く分布しています。

ある村で、開村の経緯を伝え聞いている古老からこんな話を聞きました。「100年ほど前にこの土地を開拓して村を作った。もともとここに住んでいた違う民族の爺さんが、この土地を譲ってくれた。だから村の一番高い場所は開墾せずに当時の森のまま残し、爺さんを守り神として祀っている」。また、別のある村では小学校建設のために森の木が伐られました。一番大きい木だけは残したそうですが、結局枯れました。「森の精霊が死んだから」と、案内してくれた村長がうつむいて言いました。

ラオスでの調査の間、滋賀県守山市の稲荷神社を思い出しました。琵琶湖に近い平野部の小山に立つ神社です。これは明治29年の台風で近くの川が決壊したとき、田畑に流入した土砂を集めてできた瓦礫の山に建っています。人々はここにカミを祀り、豊作を願いました。自然の怖さや恵みを伝える神社や鎮守の杜には、地域の来歴が刻まれているのです。

ラオス北部のルアンナムター県のある集落にある社。集落の住民は病気がはやるとお参りし、田植え前や収穫後には祭を営む。祀られている精霊は女性とされ、社の中には化粧品や花が供えられている（2010年11月）

社会＋時代で役割変化

神社のカミの役割は、時間が経ち、人の暮らしや社会の変化とともに、変わることもあります。例えば川が山から流れ出る、山と野の境に立つ滋賀県高島市朽木生杉の大川神社。この地域は木材の産出が盛んで、川を使って山から丸太を運んだ歴史があり、大川神社のカミは河川交通を守ってきました。しかし丸太の搬出が川からトラックに代わるとカミの役割も変わりました。「イノシシ除けのカミさんや」。山から野に出てきては畑を荒らす獣害に悩む地域の人々が見出した新しい役割です。

一方、人口の集中と減少が進む日本において、特に過疎地では消滅する神社が少なくありません。福井県越前市のある集落では、神社を閉じた人がいます。それは、集落の最後の住人となったご夫婦です。彼らは今年の夏に離村し、集落は閉村します。その離村の前に神社を更地に戻したのです。二人で少しずつ社を解体し、「最後の柱が倒れたとき、主人は泣き崩れていました」と奥さんに聞きました。集落を守ってきた神社を自然に還すことで、閉村のけじめとしたのです。その後も二人は何もなくなった跡地の手入れを続け、やはりここが集落の鎮守であった記憶を残したいと、小さな碑を立てました。それが集落の鎮守という役割を終えた土地に対する墓標のように見えました。

土地には命がある、ということを神社調査―土地との問答―の中で考えるようになりました。人と同じように、生まれ、その時代ごとに性格や役割を変え、最期には自然に還る。人は、祭や掃除などの共同作業を繰り返しながら、そこにカミを見出し、「神社」として土地に命を与えてきました。神社やカミは、人と自然との向き合い方の履歴を示すものであり、目に見えないものや人以外のものを思いやる人間の想像力の発露だと思うのです。土地を生産力や経済性で見るのではなく、聖地として命を与え、そこに主体性を認めるこの能力は、自然環境がそのバランスを失い、環境問題が各地で大きくなる中、それらに歯止めをかけるために必要不可欠な感性ではないでしょうか。今だからこそ、神社がそこにある意味をもう一度考えてみたいと思うのです。＝第2水曜に掲載します

閉村に当たって閉じられた菅八幡神社の跡地を示す石碑と、最後の住人となった女性（2018年9月、福井県越前市菅町）

しまだ・なほこ　1982年奈良県斑鳩町出身。滋賀県立大人間文化学部卒。京都大東南アジア研究所特任研究員、関西学院大や京都造形芸術大の非常勤講師を経て、2016年から現職。専門は建築学、思想生態学。

※京都新聞社の許可を得て掲載しています